

年間第12主日

福音朗読 マルコ 4・35-41

2024.6.23 9:30 ミサ
カトリック高円寺教会
主任司祭 高木健次神父

今日の福音では、ガリラヤ湖での嵐の場面が朗読されました。ガリラヤ地方から死海にかけては細長い、海の高さよりも非常に低い低地がずうっと続いている。しかしその両側は山地になっているから、ガリラヤ地方っていうのは、大きな形で言うならば、谷底のような場所に位置しているので、突然強い風が吹くということがあるようです。ビル風みたいなもんで、風が通るとそれが全部下に集まって来て、大きな嵐になる。湖であっても。そういう中で弟子たちとイエス様が乗った船が嵐の中に巻き込まれてしまうという、そういう場面の朗読だったわけです。しかし、その時にイエス様が眠っておられた、と福音書は語るわけです。

マルコの福音書は、まずこの場面を、最初のキリスト信者の共同体が迫害の嵐の中で、そういう困難の中に見舞われているという状況と重ね合わせて、なぞらえてこの場面を伝えていると考えられています。しかしそれだけではなくて、ずうっとこの福音書が書かれた時代から今に至るまで、聖書を読む人たちは、弟子たちがこの大きな嵐に巻き込まれているのにイエス様が眠っておられる、つまり何にもしてくれないように見えるっていう、その状況をそれぞれの人生の困難な時と重ね合わせて読んできたんじゃないかなあと、そういう気がします。今ここにお集まりの方の中にも、やっぱりその思いでこの箇所に触れた方もおられるのではないかなあとと思います。

外国の20世紀のあるキリスト教作家がこんなことを書いていたそうです。「神様というのは、わたしがとても幸せで神様に救いを求める必要がないときに神様のほうに向かおうとするならば、ほんとに手を広げて喜んで迎え入れてくださる。しかし、自分が本当に神様を必要な時に神様のほうに向かおうとするならば、神様の扉は固く閉じられて、そして内側から嚴重に鍵をかける音が聞こえてきて、そしてその後には全くなにも音がない、沈黙がやってくる。そうして大体自分はその前からすぐに立ち去ることになる」。そんなようなことを書いているそうですけれども、まさにそれが、苦難の時に神様に助けを求める人たちが共通して体験する、「答えてくださらない」って、その体験がまさに神様が眠っていらっしゃるっていう姿に神秘として描かれていると思います。

この場面に対して、極端な二つの解釈と言いましょうか、説明の仕方——「どうして神様は苦難の時に答えてくださらないのか」という、この問いの対して極端な答えが二つあると思うんです。

一つには、「それはね、神様がそもそもいないからだよ」っていう、そういう答えです。「イエス様は船の中で眠っているんじゃないで、そもそもいないなんだよ」っていう答えです。でも、そうだとするならば、イエス様が眠っているように思えるんだけど、それは、「いるように思うんだけどほんとはいない」ってなるならば、イエス様によって呼び集められて一緒に船の中に乗っている仲間っていうのも^{まぼろし}幻ということになります。で、人は、弟子たちがみんな船に乗っていたように思うけど、実は一人用の船に一人だけで乗って、そして嵐に翻弄されているのが現実なんだっていうことになっていくと思います。イエス様が幻であって、イエス様に呼び集められた者も幻であるならば、人はたった一人で嵐の中に投げ出されているのだっていう、でも、人間としてほんとにその孤独の状態に耐えられる、その強さを持っている人ってほんとに何人いるのかなあって疑問になります。

でも、「そもそもいないんだよ」っていうのが一つの極端な答えだとするならば、もう一つは、神様の御計画をすべて分かっているかのように、「それはね、あなたの罪に気付かせるためである」とか、あるいは「それが、あなたには分からないけど最上の道だから」とか、あるいは聖書の言葉から借りてきて「そもそも耐えられないような試練はお与えにならない方だから、耐えられるから与えられている困難で、すぐ解決が来るんだ」っていうような、なんか聖書から借りてきたような、あるいは知ったような、神様のことが全部分かっているかのような答えを出そうとするという、極端。両極端でも、それは実はつながっているんです。自分が全部答えを知っている。そもそもいないんだよっていうのもそうだし、そもそもこういう理由で神様がこの困難を与えているんだって説明できるかのように言うことも。一見反対、両極端のように思うけど、でも人間が、自分が全部説明できるんだっていうことでは共通してるわけです。

でも、わたしたちに呼びかけられている信仰の立場っていうのは、ほんとはこの両極端の間にあるんだと思います。その中の一つが、今日の弟子たちのように、「イエス様、わたしたちが滅んでも——溺れてもって訳されてるけど、直訳すれば、滅んでも——構わないのですか？」(マルコ 4・38)って叫ぶっていう、問いかけるっていう態度も一つなんだと思います。あるいはまた、もしこの船にマリア様が乗っていたとしたら、マリア様は完全に信頼しているから、自分では分からないけど、でも船の中ではその時まで信頼を持って、嵐が鎮められるまで待ち望むっていう、そういう姿勢をとられたかもしれません。

でも、マリア様のことは書いてなくて、弟子たちのそういう慌てふためいて「イエス様、わたしたちが滅んでも構わないんですか？」っていうことを書いているのは、やっぱりそういう思いをいつも持っている歴史上のいろんな沢山の人たちに、「弟子たちもそうだったんだよ。今のあなたと同じような気持ちを持ったことがありますから」という励まし、あなたは一人ぼっちではないということを示しているような、そのためにこの出来事があるのではないかという気がしています。

わたしたちが確実に言えることっていうのは、「先生、わたしたちが滅んでも構わないのですか？」っていう問いに対して、イエス様ご自身もご自分の人生を通して、それは言葉の説明ではなくて、自分自身も十字架で神様から見捨てられるっていう体験をするっていう、それを引き受けるということを通して、「わたしたちが滅んでも構わないのか？」、「どうして答えがないのか？」っていうふうな人たちとつながっておられるということ、確実に言えることはそれだけなんだと思います。そして、そのイエス様が復活して、今もわたしたちとともにおられる、というところに希望を置くわけです。

信仰を持つということは、すべてのことに答えを持っている、あるいは答えを持っているかのようなふりをするというのではないんだろうと思います。むしろ、信仰を持っているということは、どうしてこれが起っているのか分からない、それがいつまでなのかも分からない中で、その不確実な、分からないということに耐える希望を細い糸ながらも持ち続けるということなのだと思います。

今日、先程申し上げましたけども、聖ペトロ使徒座の献金の日っていうことになっていきますけども、聖ペトロ使徒座っていうのはバチカンのことです。あつという間ですね、一年前もこの説明をした気がしますけど、バチカンで教皇様が世界中のいろんな所にお出かけになって行く、そういう活動のための献金であります。特にフランシスコ教皇様は、教会が順調な所にご褒美として訪問するっていうことではない。むしろ、キリスト信者が少ない所であってもほんとに問題の所に、禍中のところにいつもいらっしゃる。それはもちろん健康が許す限りということになるわけですけども。それはまさに、イエス様がいらっしゃって、そしてイエス様を通してつながっているっていうことは、決して幻ではないんだ、思い込みではないんだ、実際にイエス様がわたしたちとともにいて、そして人と人が互いに同じ船に乗って、その不安や困難も共有し合う、そういうつながりを、決して孤独の中に投げ出されているのではないということを示すっていうのが大きな共通した教皇様の活動の目的なのではないかなあとと思います。

そういう教皇様のことを支えるっていう思いを新たに、活動をいろいろな形で支えるという思いを新たにすると同時に、わたしたちも今イエス様の周りに今日もミサのために集められた者たちが、今ほんとに「わたしたちが滅んでもかまわないのか？」って問い続けている、その状況の人たちのことを思い起こしながら、互いに希望を保てるように祈り合いたい、このごミサを通して、イエス様——ご自分もその道を通られた、見捨てられた者の仲間になられたイエス様との一致の恵みを願いたいと思います。